

市川自然博物館

6・7月号

（通巻第5号）

たより



～トビハゼ～

トビハゼは魚のくせに水の中がきらいで、いつも干潟の泥の上を飛び跳ねています。5月から7月が繁殖期で、干潟にクレーター状の巣穴をつくって、何匹もが出入りを繰り返します。しかし、とびでた2つの眼には周囲の様子が残らず映るようで、人や鳥が近づくと、そばにあるカニの穴などに飛び込んでしまいます。一度隠れるとなかなか出てこないで、トビハゼ観察はけっこう骨が折れます。

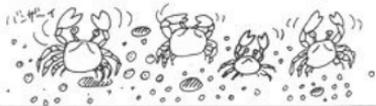
昔は有明海や瀬戸内海、東京湾などの内湾の干潟にいくらでもいましたが、有明海以外では少なくなりました。東京湾では、江戸川放水路などでわずかにみられます。

特集 干潟を

春から初夏にかけては、潮干狩りのシーズンです。この時期の大潮の干満の差は一年中で最も大きく、特に昼の干潮時にたくさん引くので、長い時間広い干潟が現れるのです。潮干狩りというと、もっぱらアサリ採りと考える人が多いのですが、干潟には、その他にも実に多くの生物が暮らしています。江戸川放水路は海水が入り込む入江になっていて、兩岸には広い干潟がひろがります。みなさんも、放水路の干潟を歩いて、そこの住人たちと知り合いになってみませんか。

カニ・ウォッチング

干潟を歩いてみても、まわりにカニの姿はなかなか見られません。しかし、巣穴らしきものはたくさんあります。カニの作った砂の団子も散らばっています。こんなときは、歩くのをやめてしばらくじっとしていきましょう。すると、あちこちの穴からカニたちがでてきます。ヨシの生えた所に住むのはアシハラガニやクロベンケイガニ、砂泥地のやや大きな穴にはヤマトオサガニ、小さい穴にはチゴガニやコメツキガニがいます。チゴガニは大勢そろって万歳をするので、思わず笑ってしまいます。



カカミガイ

シオフキガイ



オオノガイ



オキシジミ



ウミナ



マテガイ

貝類ウォッチング

アサリは食用としてよく知られていますが、アサリの特徴は貝殻の模様がさまざまなこと。このほか砂の中に数多く見られる二枚貝は、オキシジミとシオフキです。どちらも4cmぐらいの丸くふくらんだ貝で、アサリのような模様はありません。オキシジミは、黒～紫色ですがシオフキは紫がかった褐色をしています。このほかに、ハナグモリガイ（黄褐色）、カカミガイ（白色）、オオノガイ（白色

あるこう



だが黒色の殻皮をかぶっている)、マテガイ(黄土色)などの貝もいます。以前はハマグリがたくさんいたのですが、最近全くといってよいほどいなくなりました。これらの二枚貝はどれも砂泥の中にもぐっていて、満潮で水のあるときには、入水管と出水管という2本の管を砂の中から外に出し、海水を吸い込んで、そのなかのプランクトンを食べたり呼吸したりしています。アサリやシオフキは浅くもぐっていて、この管が短いのですが、深くもぐっているオオノガイは、この管を30cmも伸ばしているのです。

干潟にいる巻貝は、細長いイボウミニナやウミニナ、それに小さく短いアラムシロガイが主なものです。これらの巻貝の死殻のなかには、しばしばホンヤドカリという小さなヤドカリが入っていて、ごそごとと干潟をはいまわっています。ヤドカリはカニに近い仲間です。

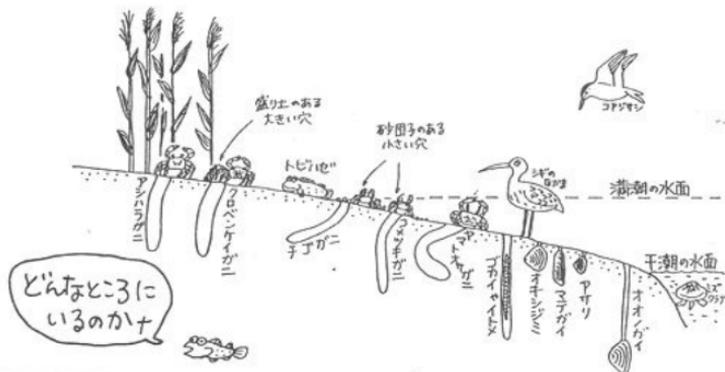
そのほかの動物

干潟の砂泥を掘ると、釣り餌になるイトメやゴカイが出てきたり、もっと大きいクロムシが出てきたりします。満潮のとき流されてきて、そのまま残り残された、寒天のようなミズクラゲも見つかります。

海藻の仲間

干潟で一番たくさん見られるのは、緑色をしたアオサです。そのほかには、お刺身のつまになるオゴノリも見られます。オゴノリは、生きている時は褐色ですが、アクぬきをすると鮮やかな緑色に変わります。寒天の材料としても使われます。

干潟へでかける時は、干潮の時刻を調べておくとういでしょう。干潮の前後2時間くらいが、いちばん観察に適しています。



市川・自然探検

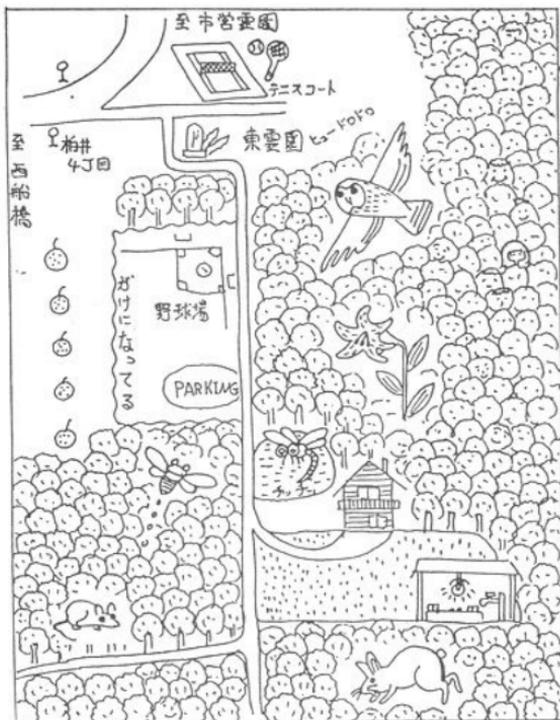
～柏井雑木林～

市川には、まだあちこちに林が残っています。しかし、そのほとんどは小さな斜面林で、平らな林はあまりありません。市の北東部、柏井町にある雑木林は、平らな林としては市内最大で、青少年の森としてキャンプ場などが整備されています。

そこは、春と秋には色とりどりの花が咲き、夏にはたくさんの昆虫、さまざまな野鳥が四季を通じて林を訪れ、もしかしたら、ノウサギやフクロウに出会えるかもしれません。蚊が多いし、交通の便もよくないけれど、たまには林歩きもいいものです。家のまわりや街なかでは見られない自然のすがたに触れることができるはずですよ。

〔交通〕

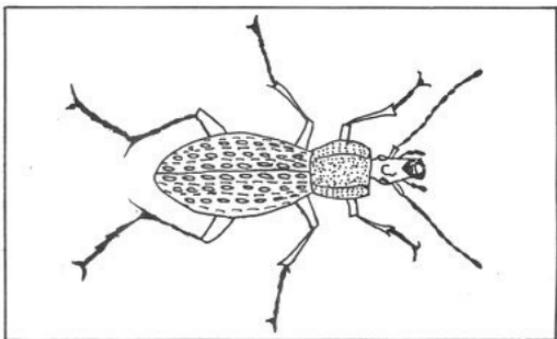
『西船橋⇄市営雲園』の京成バスで、柏井4丁目（市営雲園の1つ手前）下車。徒歩すぐ。



市川の **こん虫** **アオオサムシ**



オサムシの仲間は、マイマイカブリやエゾカタビロオサムシなど、日本に数種類います。アオオサムシは中でもごく普通に見られ、市内では大町周辺や柏井雑木林などの地面の上をよくはいまわっています。生きている昆虫や動物の遺体などに集まって食べてい



るのを時々みかけます。さて、このオサムシという名前ですが、この虫の形に由来しています。昔、手織（てばた）で布を織る時に使った「おさ」に形がとてもよく似ていたので、「おさ・むし」と呼ばれたのです。

アオオサムシは敵に会うと、目に入ると激痛がある白い毒液をお尻から敵めがけて噴出し、身を守ります。冬になると、土の中に穴をほり、そこで冬越しをします。

むかしの市川 ～その4～

国府台のキツネ

国府台5丁目に在住の石井与吉さん(76)から聞いた話です。

子供の頃、今の国府台小学校のあたりは、深い雑木林で、直径50cm位のキツネの穴が20個ほどありました。穴の外にはガマガエルなどを食べたあとがちらちらとあって、柿くち近寄れませんでした。ススキの原には「キツネの遊び場」といって、円形に草がなぎ倒された場所があり、1日に1～2箇所は見つかります。キツネはかなりいたようで、夜になるとよく鳴き声が聞こえてきました。

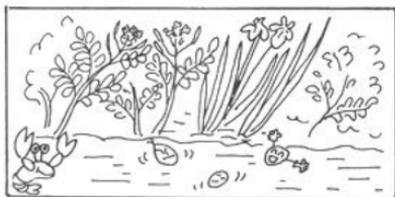


その頃は、軍隊の練兵場があって、朝はよくキツネが遊んでいました。多い時は、20匹もいた時がありました。近くでよくニワトリがキツネにやられるので、キツネ退治をやろうと、大人が10人位集まって、キツネの穴を煙でいぶしましたが、キツネはでてきませんでした。キツネは昭和12年頃までいたようです。

大	
町	歳
	時
	記

夏が近づき、観察園の湿地はみるみるうちにヨシの濃い緑で覆いつくされました。冬の間掘りおこした水路も、またたく間に草でみえなくなりました。しかし、水路のあるところは、はっきりとたどることができます。クレソンの種子はよく発芽し、成長も速いので、水に運ばれ、水際によく繁茂します。ですから、水路はクレソンでできた道になっているのです。クレソンの道はほとんど伸びます。ついには観察園を抜け出して、霊園わきの側溝にも進出中です。このように、種子が水によって運ばれて観察園の中に拡がった植物は、他にジュズダマ

やサジオモダカがあります。キショウブも繁殖力が旺盛で、種子で拡がり次々と株を増やし、園内のあちこちで黄色い美しい花を咲かせています。ハナショウブやカキツバタだけでなく、湿地の中のこんな植物にも目をむけてみてはいかが？



行徳野鳥観察舎 だより

キショウジョシギ

「この鳥は、ニューギニアやオーストラリアの方から渡ってきて、アラスカに向かいます。片道だけで1万キロも飛ぶんですよ。」

茶・黒・白と色あざやかなキショウジョシギを見つけると、うれしくて説明に熱が入る。渡りの時期に東京湾に立ち寄るが、1羽の滞在期間は春は数日、秋は数週間程度だろう。5月末に繁殖地に到着してから産卵・抱卵・子育てを2か月あまりで終え、8月には再び南へ旅立つ。見るからに気ぜわしい鳥だ。

短めの嘴をてこに使って、汀の土くれや石をばっばっとひっくり返し、裏側にひそむ小動物を餌にする。引き締まった小ぶりの体は120gそこそこだが、秘められたエネルギーははかり知れない。壮大な旅に幸運を。 - 6 -



文と絵・蓮尾純子

展示室より

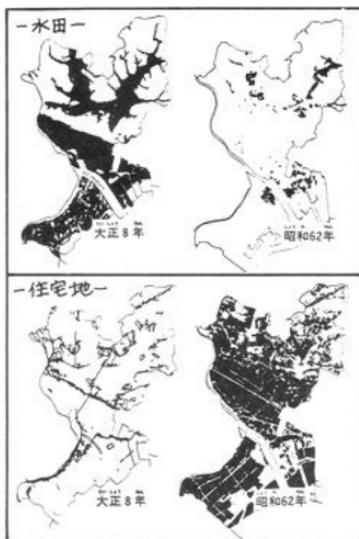
ひろがる市街地

かつての市川の自然の様子を伝えてくれる資料として、古い地形図があります。

地図に記された記号をもとに、年代ごとの土地利用の状態を比較してみると、現在までの自然の変化がみえてきます。

大正8年には一面に水田が広がっており、住宅地（市街地）はわずかに古い街道にそってあるだけでした。しかし、昭和62年になると水田はごくわずかになり、ほぼ全域が住宅地になりました。

こうしてみると、現在の市川の自然の姿は都市化された結果といえます。そして、市街地のまわりにわずかに残る昔ながらの自然と、市街地の中で息づいている自然とによって特徴づけられているのです。



草木で遊ぼう

ソラマメの人形

ソラマメでユーモラスな豆人形を作りましょう。ソラマメのサヤをふたつに割って図のように、サヤの内側からイヌムギやカモジグサなどのイネ科の雑草の茎を通し、豆に穴をあけて茎にさしこんで、手と頭を作ります。豆に顔を書き、茎を上下して遊びます。

